神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Coleridge and literary tourism : his two cottages in somerset

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉川, 朗子, Yoshikawa, Saeko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1516

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

コウルリッジと文学観光：サマセットの二つのコテージ

吉川　朗子

１．文学観光と文学受容

19世紀の英国では、鉄道などの交通手段の発展により、中産階級の余暇の楽しみのひとつとして観光が急速に発達したが、なかでも文筆家の家や墓、作品ゆかりの場所を訪ねる文学観光（literary tourism）は大いに発展した。[1] ここには、雑誌や安価な書籍の増加などによる読書層の拡大という現象も関係するだろう。中産階級の女性を中心に拡大する読者の関心を引くために、作家の生涯（半生）を、ゴシップを交えて綴る伝記的読み物も多く現れた。他方、文学作品には挿絵（写真も含む）がふんだんに添えられるようになる。これにより、一方では文筆家本人の私生活に対する関心が、他方では作品の舞台となる場所・風景への読者の関心が高まり、文学観光が発展していったと考えられる。[2] ガイドブックは競うように文学作品を引用し、作家や作品ゆかりの場所を紹介するなど、その促進に寄与した。[3] 時代が進むにつれ、文学的謂われのある場所には案内板がたち、絵葉書や版画などの土産物が売られ、博物館・資料室なども整備されるようになる。こうして19世紀末にかけて Shakespeare, Burns, Scott, Wordsworth, Brontë 姉妹などの家が記念碑化されていった。[4]

こうした文学観光は文学受容の一つのあり方を示しており、文筆家たちの名声形成とも深く関わる。Jan Palmowski は、*Murray's Handbook to Italy* は

1　19世紀英国における文学観光の諸相については Watson [2006], Watson [2009]を参照。文学が観光文化に与えた影響については Ousby, Robinson & Andersen を、また19世紀の観光文化の誕生については Buzard を参照。

2　19世紀前半の文筆家の伝記と文学観光との関連については North [2009] 及び Watson [2009] 所収の North の論考を参照。また Easley はヴィクトリア朝における著名な作家をもてはやす文化（celebrity cult）と文学観光との関係を論じている。Howitt [1847] や Hall [1871] などは著名人（特に詩人・作家たち）の家を魅力的に紹介し、文学観光に大きな刺激を与えた。

3　スコットランドでは Black 等のガイドがスコットやバーンズを、湖水地方では Black, Murray 等のガイドがワーズワスを、イタリアでは Murray 等のガイドがバイロンを多く引用した。

4　シェイクスピアの家は18世紀末より注目され始め、1847年に保存・改修のために買い取られた。バーンズの生家への文学巡礼は彼の死後間もなく始まり、1881年に保存・改修のために買い取られた。スコットは自らの館を1811年から訪問客に公開している。ブロンテ姉妹の牧師館はヴィクトリア朝期人気の文学観光地となり、1928年に買い取られ博物館として公開された。Watson [2009], Hendrix などを参照のこと。

Byron や Shelley の人気に新しい局面をもたらしたと論じる（Palmowski 111-12）。Wordsworth の場合にも、その名声の高まりが湖水地方にある住居 Rydal Mount などゆかりの場所を観光地化することに繋がる一方、湖水地方観光の発展は、ガイドブックを通してワーズワス作品を幅広い読者層に伝えることに寄与した。[5] 文学観光という文化現象を辿ることで、文学研究者・批評家たちの言説のみから窺えるのとは違った文学受容のあり方が見えてくるだろう。

ワーズワスのライダル・マウントが文学巡礼者たちの訪問を受け始めていた1820年代、ロンドンの Highgate に暮らす「賢人」Coleridge の元にも大勢の崇拝者たちが訪れ、そこもまた一種の巡礼地となっていた。[6] しかし1834年にコウルリッジが死去すると、文学巡礼地としてのハイゲイトの人気は次第に衰えていく。これに取って替わったのは、現在博物館として公開されている Nether Stowey のコテージではなく、ブリストル近郊の Clevedon にある Myrtle Cottage だった。現在ではあまり重要視されていないが、19世紀の大部分を通して文学旅行者の間で人気があったのは、ハイゲイトでもネザー・ストーウィでもなくクリーヴドンのコテージだったのだ。このことは、文学史的意義とは少々異なるコウルリッジ像―深遠なる思想家でも批評家でもなく、幻想的な世界を現出させる想像力豊かな詩人とも異なるコウルリッジ像―を垣間見せてくれるだろう。なぜマートル・コテージは「コウルリッジ・コテージ」として記念碑化されたのか。そしてなぜ、その地位はやがてネザー・ストーウィのコテージに奪われていったのか。本稿では、サマセットにあるコウルリッジの二つのコテージの扱われ方を文学観光との関連で辿ることで、19世紀から20世紀初頭にかけてのコウルリッジ受容の様相について新しい光を当ててみたい。同時に、文筆家たちの家が記念碑化される際に辿る二つの異なる過程についても確認する。

２．ダヴ・コテージ公開とネザー・ストーウィ

1891年ワーズワスの Dove Cottage が保存のために買い取られ、博物館として公開されると、コウルリッジの暮らしていた家への関心が俄かに高まる。1892年９月の *The Daily Telegraph* には ‘Fate of Coleridge’s Cottage’ という見出しで次のような記事が掲載された。

> In a recent visit to the Quantocks, in Somersetshire, I was surprised to find that Coleridge’s Cottage in Nether Stowey had no other mark of distinction

5　19世紀前半におけるワーズワスの受容と湖水地方観光の関係については、‘Wordsworth in the Guides’, *Grasmere 2010*（2010）: 101-14の中で詳述した。

6　Holmes [1999] 487, 488, 543-4など参照。

> except the signboard which showed that it was merely a wayside inn. … surely it would not cost much to provide it with one of those metal plaques with which in London we distinguish the homes of celebrated men and women; nor, indeed, would it be very extravagant to rescue it from the degradation of being a public house.[7]

ここでは、ネザー・ストーウィにあるコウルリッジのコテージが酒場に成り果てていることが嘆かれ、せめて記念プレートでも用意できないだろうかという提案がなされている。これに応える形で、この年の9月には様々な新聞で、ネザー・ストーウィのコテージを保存して文学巡礼者たちが来てくれるような場所にしようと提案する投稿記事が数多く現れる。地元の新聞 *Bridgwater Mercury* には、次のような提案がなされている。

> It has been suggested that the building might be transformed into a literary institute, containing a library in which the works of the Quantock poets would form a conspicuous part, that a room should be arranged for the delivery of lectures and that the garden close by should be laid out with laurel hedges and winding walks, such as are supposed to have existed during Coleridge's time.[8]

庭をコウルリッジのいた頃のようにレイアウトし直したり、コテージを文学館のような場所にしようというアイデアは、ダヴ・コテージ保存運動を支えた理念と同じであるし、ワーズワスとコウルリッジのことを the Quantock poets と呼ぶあたりにも、the Lake poets という呼び名への対抗意識が感じられる。寄付集めのための記事が書かれる際にも、ネザー・ストーウィこそがコウルリッジの詩人としての才能が開花した重要な場所であると強調されることが多く、ここでもまた、ダヴ・コテージ保存のためのキャンペーンと似たような主張がなされている。

しかしながら、1893年に首尾よく記念プレートが取り付けられたものの、それ以降コテージ保存のための寄付集めは難航する。ダヴ・コテージが僅か1年

7　*Daily Telegraph*, 9 September 1892参照。同じ記事は *Bristol Mercury*, 10 September 1892; *Leeds Mercury*, 13 September 1892; *Berrow's Worcester Journal*, 17 September 1892などにも配信された。なお19世紀の新聞記事については、断りのない限り British Library 提供のウェブ版アーカイヴ *British Newspapers 1800-1900*を参照している。

8　*Bridgwater Mercury*, 28 September 1892, quoted in Miall 84.

で必要な資金を集めたのとは対照的に、ネザー・ストーウィのコテージがようやく買い取られたのは15年後の1908年夏のことである。コテージはナショナル・トラストの管理のもと1909年一般に公開された。寄付集めの経緯についてはDavid S. Miall が ‘The Campaign to Acquire Coleridge Cottage’ という記事のなかで詳述しているが、その冒頭部で彼は「19世紀の大部分を通して、ネザー・ストーウィにあるコウルリッジ・コテージはほとんど顧みられることがなかった」と述べている（Miall 82）。では19世紀の文学旅行者たちの間でコウルリッジは人気がなかったのかと言うと、そういう訳ではなさそうだ。

３．クリーヴドンのマートル・コテージ

前節で、ダヴ・コテージが一般公開された際に出た、ネザー・ストーウィについての嘆き節の記事を紹介したが、実は同じ頃次のような短い記事も出ていた。1891年７月の記事である。

> Coleridge’s cottage at Clevedon, Somerset is “in good preservation,” and much visited by literary enthusiasts who have read the romantic story of how the poet brought hither his young bride now hard upon a century ago. Coleridge’s description ought to protect it: --
>
> Low was our pretty cot; our tallest rose
> Preserved at the chamber window. We could hear
> At silent noon and eve and early morn
> The sea’s faint murmur. In the open air
> Our myrtles blossomed and across the porch
> Thick Jasmines twined.[9]

ここに引用されている詩行はコウルリッジの ‘Reflections on Having Left a Place of Retirement’ からのものだが、とりわけこの詩の冒頭部は19世紀を通

9　*Hampshire Advertiser*, 11 July 1891.

10　例えば *New Elegant Extracts*（1823）, *Young Lady’s Book of Elegant Poetry*（1835）, *Extracts for Schools & Families in Aid of Moral & Religious Training*（1850）, *Fireside Readings*（1881）などのアンソロジー、*Flora and Thalia*（1835）, *Gift of Sentiment*（1854）, *Bridal Bouquet*（1873）などのギフトブック、*Murray’s Handbook for Travellers in Wiltshire, Dorsetshire, & Somersetshire*（1859）, *A Guide to Healthiest & Most Beautiful Watering Places*（1864）などのガイドブック、*A Year in Europe*（1859）などの旅行記、Bell の地名辞典（1836）などに全文または冒頭部分が引用されている。

して様々なアンソロジーやギフトブック（後述のように家庭教育、道徳教育、女子教育を目的とするものが多い）に組み込まれただけでなく、ガイドブック、地名辞典、旅行記などに繰り返し引用された。[10] コウルリッジの家と言えば、19世紀の大部分を通してこの詩に描かれているコテージを指し、ネザー・ストーウィにあるものではなかったのだ。詩人のコテージにはバラやギンバイカ（Myrtle）、ジャスミンが植わっていなければならない。1891年 8 月の新聞記事には、冬の寒さにやられたギンバイカが刈込のおかげで今は元気に繁茂している、という報告が載っている。[11] また1897年 7 月の新聞には次のような逸話が紹介されている。

> The memory of Samuel Taylor Coleridge is being kept alive at Clevedon by a myrtle which has just been planted at Coleridge Cottage to replace one which had given up the ghost. When S. T. C. left Somerset for Highgate he took with him a myrtle. On his death the tree and the poet's inkstand were presented to Mr S C Hall, who afterwards gave the inkstand to Longfellow and the myrtle to the late Lord Coleridge. The tree just planted at Clevedon is a slip from the original, and has been presented by the present Lord Coleridge. An interesting little story.[12]

この記事によれば、クリーヴドンのコテージに植わっていたギンバイカの枝がロンドンのハイゲイトに持ち込まれ、コウルリッジの死後、その木から取った枝が再びクリーヴドンのコテージに里帰りし植え直されたということになる。信憑性の疑わしい記事ではあるが、ギンバイカがいかにコウルリッジのコテージと切り離すことの出来ない植物であったかを示す逸話だ。似たような逸話作りはライダル・マウントでも行われていた。その庭に繁茂する月桂樹は、ヴァージルの墓にペトラルカが植えた月桂樹の小枝を、ワーズワスが持ち帰って育てたものだという噂が、19世紀末まことしやかに伝えられていたのだ（Collins 106-16）。ワーズワス巡礼者にとってライダル・マウントから記念に持ち帰る月桂樹の葉が大切であったように、ギンバイカはコウルリッジの形見として大事にされた。[13] これらの逸話は、詩人と家（庭）との結びつきを強め、文学旅

11　*Daily News*, 14 August 1891参照。

12　*Trewman's Exeter Flying Post*, 16 July 1897参照。

13　例えばS. C. Hallは、マートル・コテージから持ち帰ったギンバイカの小枝を、コウルリッジの形見として友人たちに送っている（Goss 445）。1891年夏にマートル・コテージを訪れたAubrey de Vereは、ギンバイカが嵐にも負けず新たな芽を出していることを愛おしげに記述している（Ward 383）。

行者がそこから持ち帰る記念の品の価値を高める効果があっただろう。ひとつの場所から別の場所へ移植されることで詩人たちの霊力を運ぶと信じられた植物は、ゆかりの場所を訪れる文学旅行者たちと詩人たちとを繋ぐ縁として大事にされたのだ。クリーヴドンのコテージはマートル・コテージと呼ばれて親しまれた。

４．観光とコウルリッジ・コテージ

19世紀において、ネザー・ストーウィよりもクリーヴドンのコテージの方が親しまれたのは、ギンバイカのためだけではない。当時の観光産業も関わっていた。ネザー・ストーウィは観光向きの場所ではなく、訪れる人は限られていたが、[14] ブリストルから15マイルのところにある風光明媚な海辺の町クリーヴドンは、1820年代後半ごろより注目を集め始めており、特にブリストルからの行楽客を呼び込んでいた（Walton 53-63）。1829年の *Gentleman's Magazine* にはクリーヴドンが新しい海辺の行楽地として紹介され、1836年代の地名辞典には、ギンバイカなど寒さに弱い華奢な植物が一年中庭に揺れているような温暖な気候に恵まれた楽園、と紹介されている（Bell 1: 63）。コウルリッジが暮らした1790年代には海から遠く離れた小村にすぎなかったが、その後海辺に次々と瀟洒な別荘が作られていく。1888年リゾート地として賑やかなこの地を訪れた William Jones-Hunt は「コウルリッジのコテージにギンバイカが植えられたとき以来、クリーヴドンは海に向かって移動してきたのだ」と評している。[15]

クリーヴドンが観光地としての地位を確立し始めるのとマートル・コテージが注目され始めるのは、軌を一にしている。1797年以来様々なアンソロジーに収められていた 'Reflections ...' に描かれるコテージを、クリーヴドンにある現実のコテージと初めて明確に結びつけたのは、コウルリッジの死後間もなく1837年に出版された Joseph Cottle による回想録と見てよいだろう。

> I was rejoiced to find that the cottage possessed everything that heart could desire. The situation was also peculiarly eligible. It was in the extremity, not

---

14　マイアルによれば、ネザー・ストーウィにあるコウルリッジ・コテージを保存すべきだという関心が初めて公にされたのは1870年代半ばのことだが、William Howitt は1840年代にビア・ホールになっていたコテージを訪れたときのことをユーモラスに描いており、彼によれば熱心なコウルリッジ信奉者がすでに時折訪れていたようである（Howitt ii, 113-15）。しかし19世紀末には、コウルリッジ巡礼者もめっきり減ってしまったようだ（*Pall Mall Gazette*, 14 May 1885）。1877年の 'Whitsuntide in the Quantocks' という記事には、コントック丘陵には宿屋は一つしかないのでリゾート向きではない、とある（*Daily News*, 22 May 1877）。

15　William Jones-Hunt, 'Seventy Years ago', *Clevedon Mercury*, 25 August 1888.

> in the centre of the village. It had the advantage of being but one story high; ... There was also a small garden, with several pretty flowers; and the "tallest rose tree," was not failed to be pointed out, which "peeped at the chamber window," (and which has been honoured with some beautiful lines.) (Cottle 1: 59-60)

ここでは、コウルリッジの新居がバラをはじめ様々な花に包まれたコテージであることが紹介されている。コトルの描写は様々なところに繰り返し引用され、コウルリッジが新婚時代に暮らしたコテージは詩に描かれた通りであるということが、文学旅行者たちの好奇心を刺激した。Clevedon Court に暮らしていた Mary Elton の手紙によれば、1838年夏にはすでにマートル・コテージを描いた絵も売られていた。[16] さらに1839年 6 月には、*Bristol Journal* に Thomas Grinfield による次のような詩が掲載された。

> Still as it stood as when that high-gifted mind
> Sojoun'd beneath it, stands the lowly cot,
> Hallow'd by Coleridge: Still the tallest rose
> Peeps at the chamber window! round the porch
> Thick jasmines twine; and myrtles grace the wall;
> .....
> ..... Alone, one summer morn,
> I sought the cot: the simple housewife plied
> Her household tasks, nor mark'd my musing gaze.
> I sat within the garden's quiet shade;
> And, while my pencil sketched the poet's cell,
> Entranc'd imagination's busy power
> Retrac'd the poet's destiny. Methought
> How little he, who here in sweet discourse
> Sat with his "pensive Sara," *then* forecast
> The mazes of his pilgrimage, or dream'd
> That, (when his dust should slumber, not his name,)—
> Like me, would many a strangers seek this cot,
> Drawn by the charm of Genius. ...
> (1-5, 13-25, underline mine)[17]

16 Mary E. Elton to Laura M. Elton, 24 July 1838 (Elton 203).
17 Quoted in *Chilcott's Clevedon New Guide* 34-35.

‘the lowly cot’, ‘the tallest rose peeps at the chamber window’, ‘jasmines twine’, ‘myrtles’ などコウルリッジの ‘Reflections …’ の描写を意識しているのは明白であるが、注目したいのは、旅行者や文学巡礼者が多くここを訪れ、物思いに耽ったりスケッチをしたりしているということが言及されている点である。コウルリッジの死後間もない頃すでにマートル・コテージは、絵や詩に描かれ、その絵が土産物として売られるほど、文学旅行者の心を捉えていたのだ。クリーヴドンは、海辺のリゾートとしての開発が始まったものの砂浜がなく、海水浴場としては近くの Weston に劣るとされたため、丘から眺める海の風景の美しさを前面に出した宣伝がされるようになっていた。[18] マートル・コテージの裏手の崖からの眺めも素晴らしく、おそらくはこうした風景美を求めてやってきた旅行客が ‘the sea’s faint murmur’ に言及した ‘Reflections …’ の詩行に反応し、コウルリッジのコテージにも関心を寄せたものと思われる。彼らは、作品中に登場するブリストルから来た訪問客—このコテージを ‘a Blessed Place’ として羨ましげに眺める男—に自身を重ねたことだろう。コテージ裏手の崖は、コウルリッジも好んだ散歩道として1880年代に庭として整備されることになる。[19]

1839年には大西部鉄道のブリストルからの支線がウェストンやクリーヴドンにまで延びて多くの行楽客を連れてきたが、海水浴を楽しむ客は前者へ、風景美や歴史的・文学的ゆかりを求める客は後者へという棲み分けが出来ていったようだ。[20] 1841年にはクリーヴドンをタイトルに冠したガイドブックも登場するが、その名も *Chilcott’s Clevedon New Guide, with Historical Notices of Clevedon Court, Walton Castle, also, a Description of Coleridge’s Cottage, and the Principal Attractions in the Neighbourhood* である。19世紀後半を通して版を重ねたこのガイドには、マートル・コテージがコウルリッジおよびグリンフィールドの詩とともに紹介され、旅行者にコテージの魅力を広めることになった。[21] ちなみにこのガイドに言及されているクリーヴドン邸は Tennyson の畏友 Arthur Hallam の母方の実家であり、ハラムの墓はこの地にある。テニソンの *In Memoriam*（1850）が出版されると、クリーヴドンはコウルリッジの他にテ

18　Lewis 1: 472, *Beedle’s* 74参照。

19　‘Coleridge and Clevedon’,*Graphic*, 21 February 1880参照。

20　Beedle のガイドは、ウェストンについては海水浴場としての魅力を紹介し、クリーヴドンについては、子供たちが砂の城を作って遊ぶことは出来ないがピクチャレスクな土地であると紹介している。また、コウルリッジのコテージは想像力に富む訪問客を魅了するだろうとある。

21　19世紀のその他のガイドでも、マートル・コテージはたいてい ‘Reflections …’ 冒頭部からの引用と共に紹介された。他方、ネザー・ストーウィがガイドブックに現れるのは、1869年の *Murray’s Handbook* まで待たねばならない。

ニソン、ハラムゆかりの土地としても宣伝されるようになる。文学的・詩的連想がこの土地の風景に知的で超俗的な深みを与えていることが強調され、他の海辺のリゾート地との差別化が図られていったのである。[22]

５．コテージ・ガーデン・ブーム

マートル・コテージを描いた絵や版画が土産物として売りに出され、ガイドブックに紹介され始める時期は、ワーズワスのライダル・マウントのイメージが広く流布され始める時期―1840年代―と重なる。そしてガイドブックにおけるこれらのコテージの描写を比べると、非常によく似ていることに気づく。ライダル・マウントの紹介には必ずといっていいほど Maria Jane Jewsbury の詩 ‘A Poet’s Home’（1826）の第２連冒頭部 ‘Low, and white, yet scarcely seen /Are its walls, for mantling green; / Not a window lets in light, / But through flowers clustering bright’（15-18）、あるいは Felicia Hemans の描写（1836）、‘a lovely cottage-like building, almost hidden by a profusion of roses and ivy’（Chorley 2: 91）が一緒に引用された。一方マートル・コテージの描写には、先ほど挙げたように、‘Reflections ...’ 冒頭部からの引用 ‘Low was our pretty cot; our tallest rose / Preserved at the chamber window’ がほぼ必ず伴われている。実態はともかく、それらの表象においては、「素朴で慎ましく、蔓植物や花に包みこまれた幸福な家庭」というイメージが強調されたのだ。これは19世紀にブームになっていくコテージ・ガーデンのイメージに他ならない。実際1899年のある観光案内記事には、マートル・コテージは花々や草木が美しく飾る典型的な英国風コテージ・ガーデンとして紹介され、「詩的許容でもなく誇張でもなく、ここにはコテージに宿る愛の実例を見ることが出来る」とまで言われている。[23]

このような理想的なイメージで捉えられるコテージならば、保存しようという動きが出てきてもよさそうに思われる。S. C. Hall は1865年 *Art Journal* への記事で、‘Reflections …’ と ‘The Eolian Harp’ からの引用を交えてマートル・コテージを紹介し、希望に溢れた若者が巡礼に来られるように、老いた人が穏やかに過去を振り返れるように、この場所を保存できないものだろうかと

22　Carry 371; Anon, ‘On Some Differences between Cottages and Castles’ 649参照。文学観光には常に「大衆化」の流れと「大衆からの差別化」の欲求との拮抗がある。文学観光は確かに文学を大衆化・商品化することにつながったが、中産階級を主な担い手とする19世紀の文学観光においては、文学という「知的で高尚な」目的を持つ旅行形態を、「単なる観光・娯楽」を目的とした大衆の旅行と差別化しようとする傾向があった。

23　‘Holiday Resorts. Clevedon’, *Bristol Mercury*, 28 March 1899参照。ただし、詩に書かれているほど美しくないという声もある。 *Notes and Queries* 6.9（February 1884）: 115参照。

問いかけている（Hall 52-53）。ネザー・ストーウィのコテージより20年以上も早い段階で、クリーヴドンにあるコテージの保存が訴えられていることは注目に値する。しかし残念ながらこの願いが実ることはなかった。その後もマートル・コテージは文学巡礼者や観光客を惹きつけ、コテージを飾るギンバイカはコウルリッジの形見として大切に守られたが、保存運動へと繋がることはなかった。1890年代にコウルリッジを記念するものとして彼の住んだ家を保存しようという運動が起きたとき、なぜ人気のあったマートル・コテージではなく、ネザー・ストーウィのコテージがその対象となったのか。ここには権威づけの問題が関わってくる。

６．ネザー・ストーウィとクリーヴドン

現在コウルリッジ・コテージといえば、ネザー・ストーウィにあるものを指し、クリーヴドンのマートル・コテージについては、その信憑性が疑われている。コウルリッジやコトルの描写のみでは、コテージを特定する決め手に欠くからだ。[24] 1980年代のガイドブックには、Old Church Road にあるコテージ—これが長らく信じられてきたマートル・コテージである—について、「コウルリッジ・コテージというプレートが付けられているが信じる必要はない」、「他にも候補はある」などと記され、そっけない記述に変わっている。いつごろからこうした変化が起きたのか。遡ると1920年出版の *Blue Guide* にはすでに、‘Myrtle Cottage, *doubtfully* identified as the “pretty cot” to which S T Coleridge brought his bride’（italics mine）と記されている。1930年代頃までは熱心にマートル・コテージを紹介するガイドもあるが、どうやら19世紀末、すなわちネザー・ストーウィにあるコテージの保存運動が始まった頃から疑念が表面化されるようになったようだ。クリフトン古物研究会の1896年５月の会合では、「自分はオールド・チャーチ通りにあるマートル・コテージこそがコウルリッジのコテージであると50年来信じてきたし、1845年に製作されたスケッチも持っている。別のコテージをコウルリッジ・コテージと呼ぶ向きもあるようだが、それはごく最近出てきた説に過ぎず怪しい」と報告されている（Warren 68-69）。この報告者は従来からの説を信じているわけだが、1899年のサマセット考古学自然史協会に提出された報告記事では、クリーヴドン東部、Wolton Road にあるコテージこそがコウルリッジ自身の描写に合致しているという説が披露されてい

24　Holmes [1990] は、クリーヴドンのどこにコテージがあったのかについては言及していない。Tom Mayberry は、記念プレートの付いたコテージはたぶんコウルリッジの住んだ家ではない、としている（45）。

25　Anon, ‘On the Coleridge Cottage, Clevedon’, 49-50.

る。[25] 1906年出版の *Literary Rambles in the West of England* では二つの説が紹介され、人気のあるのはオールド・チャーチ通りにあるマートル・コテージであるが、コウルリッジ自身の描写はウォルトン通りのコテージに当てはまる、とある（Salmon 234-35）。この論争に決着がつくことはなく、それゆえクリーヴドンのコテージは「正式な」保存の対象とならなかったのだろう。1909年にネザー・ストーウィのコテージがナショナル・トラストの管理下にコウルリッジ・コテージとして一般に公開されるようになると、人々の関心は次第にクリーヴドンからネザー・ストーウィへ移っていき、クリーヴドンのコテージ論争自体注目されなくなり、マートル・コテージについての記述もガイドブックから消えていく。

クリーヴドンではなくネザー・ストーウィを選ぶという選択には、学者的発想が働いているだろう。「所詮クリーヴドンには、コウルリッジは僅かな期間しかいなかったのだし、ここで書かれた作品は数少ない。‘The Ancient Mariner’, ‘Fears in Solitude’, ‘Christabel’, ‘Frost at Midnight’ その他の会話体詩など傑作が書かれたネザー・ストーウィこそ詩人の才能が開花した場所として重要である」という発想だ。ここで注意すべきは、コウルリッジのコテージを保存しようという運動が起きたのは、ワーズワスのダヴ・コテージの博物館化を契機にしているとしているということだ。これと肩を並べるためには学術的にも意味のある場所を記念碑化する必要があったが、ネザー・ストーウィならば十分その資格がある。ネザー・ストーウィにいたコウルリッジのそばに暮らすために、ワーズワスは Alfoxden に移り住んだのであり、この場所でこそ二人の共生関係が築かれ、*Lyrical Ballads* を生み出す精神的土壌が耕されたのである。こうした考え方を浸透させるのに重要な役割を果たしたのが、William Knight が *Coleridge and Wordsworth in the West Country*（1914）で言及しているように（116）、1890年 Edward Dowden が行った *Lyrical Ballads* 初版の復刻出版だった。ドウデンは前書きで「このきわめて興味深い詩集はコウルリッジとワーズワスが共に全盛期を過ごした1797-98年、すなわち二人がネザー・ストーウィとオルフォックスデンで友情を温めた幸せなひと時を表している。『老水夫の歌』で始まり『ティンタン寺院』で終わるこの詩集は、英詩の歴史のなかで最も特筆すべき一冊と言えるだろう」（xv）と述べている。この復刻版によってワーズワスとコウルリッジのコントック丘陵での共生時代への関心が高まり、コウルリッジのネザー・ストーウィ時代の重要性も再認識されるようになっていったと考えられる。

それでも、第 2 節で述べたように、ネザー・ストーウィでのコテージ保存運動にはなかなか支持が集まらず、これが軌道に乗るには、1906年にウィリアム・

ナイトが加わって精力的にキャンペーン活動を繰り広げるまで待たなければならなかった。ナイトの呼びかけに応じた賛同者の名前を見ると、文筆家、大学教授、聖職者、政治家、貴族など社会的地位が高く、発言力の大きな人々が多い。また、ナイトをはじめ、 Stopford Brooke, H. D. Rawnsley, James Bryce, Ernest De Selincourt など、ワーズワスのダヴ・コテージの博物館化に尽力した人々が多く名を連ねていることが分かる。[26] コテージ獲得のためのキャンペーンを振り返って、ナイトは「イングランド北部でダヴ・コテージがワーズワスの記念碑として確保された以上、南部でコウルリッジ・コテージがコウルリッジへの記念碑として永久保存されることは、まさに当を得た望ましいことであると思えた」と述べている（Knight 121）。ワーズワスとコウルリッジは対になるもの、補完し合うものとして捉えられている。ある意味で、ワーズワスにとっても重要な場所であったからこそ、ネザー・ストーウィのコテージが選ばれたとも言える。ネザー・ストーウィのコテージ保存の訴えはこのようにして権威付けられ、博物館化にこぎ付けたのである。

7．非公式の記念碑

マートル・コテージが無視されたのは、これがワーズワスとは無関係だったからかもしれない。他方このコテージはコウルリッジの暮らした家ではないかもしれないという疑いは、実は1850年代にすでに出ていた。1857年アメリカ人の旅行者 Joseph Cross がクリーヴドンを訪れるが、彼はある小さなコテージを熱心にスケッチしているアマチュア画家を目にする。何を描いているのだろうと見ていると、通りかかった娘が「みんなこの醜いちっぽけな小屋をスケッチしに来るの、コウルリッジはここには暮らしていないのに」と言うのが耳に入ってきて、ああ、これはかの有名なマートル・コテージかと納得したと記している（Cross 485）。続いてクロスは、コトルによるコテージの描写とコウルリッジの ‘Reflections …’ 冒頭部を引用する。クロス自身はこれらの描写がマートル・コテージにぴったり当てはまると考えたわけだが、疑いを持っていた人もいたのだ。[27]

しかし、そうした疑念をかき消してしまうほどに、19世紀を通して（20世紀も1930年代ぐらいまでは）長い間オールド・チャーチ通り55番にたつマートル・

26　Miall 85, Knight 121-22参照。他に、例えば Aberdeen 伯爵、St Albans 主教、 St Andrews 主教、Trinity College 学寮長、George Meredith, W. M. Rossetti, Swinburne, Tennyson の息子、Browning の息子、James Bryce M.P. などの名前が挙がっている。

27　Berta Lawrence は、コトルがコウルリッジのコテージについて一階建てであると言及していることに触れ、建て替えられていない限り、二階建てのマートル・コテージはコトルの記述に当てはまらないと却下している（Lawrence 73）。

コテージは、コウルリッジの家として地元の人、観光客、文学巡礼者、画家、写真家たちに愛されてきた。この事実はそれだけで意味のあることではないだろうか。ワーズワスが Hawkshead Grammar School に通っていた時期に暮らした Ann Tyson のコテージについても、本当のところどのコテージだったのか客観的証拠があるわけではないが、19世紀後半に村の中心部にあるコテージが文学旅行者たちの巡礼地となり、記念プレートが取り付けられるに至った。マートル・コテージのケースもこれと似ていなくもない。[28]

19世紀末から20世紀にかけては、軍人・政治家・文人・芸術家など著名人たちの偉業を讃える記念碑が盛んに作られたが、文筆家たちの場合、彼らの暮らした家が記念碑化されることが多かった（Hendrix 1-10）。Harald Hendrix は Pierre Nora の「記憶の場所（lieux de mémoire）」という概念を用いて、文学観光が文筆家たちの家を記念碑すなわち「記憶の場所」に作り替え、文化的記憶（cultural memory）の創出に寄与したと論じている（Hendrix 1）。ノラの言う「記憶の場所」とは人為的に作られたものを指すが、記念碑化という過程には自発的なものと人為性の強いものとがあるだろう。ワーズワスの家の場合、ライダル・マウントやホークスヘッドのコテージは、旅行者・文学巡礼者たちが足繁く通ううちに自発的に生まれた記念碑だった。他方ダヴ・コテージは、19世紀後半に徐々に注目を集めてはいたものの、それを詩人の家として保存するためには、ライダル・マウントよりも文学史的に重要である（より重要な作品が書かれた場所である）と宣伝する必要があった。[29] その意味でより人為性が強い。コウルリッジの二つのコテージについても、クリーヴドンのものが旅行文化、コテージ・ガーデン・ブームのなかで自然に記念碑化されたのに対し、ネザー・ストーウィのものは、寄付集めのキャンペーンによって人為的に保存され、記念碑となったと言える。

ワーズワスとコウルリッジの「自然発生的に」記念碑化されていったコテージ—とりわけライダル・マウントとマートル・コテージに共通するのは、これらの家が、そこで書かれた作品が持つ文学史的価値よりも、それぞれの詩人が当時担わされていた文化的価値を表しているということだろう。どちらも、実態はともかく、数々の言語的・視覚的表象を通して、花や緑に包まれた英国風コテージの典型として多くの人々を惹きつけた。ヴィクトリア朝期においてワー

28　ホークスヘッド時代にワーズワスが暮らしたコテージを巡る論争については Jay を参照。

29　ダヴ・コテージをライダル・マウントより重要視する議論で重要な役割を果たしたのは、Matthew Arnold が1879年版ワーズワス詩集へつけた序文である。彼はそこでワーズワスの傑作は1798-1808年のいわゆる「黄金の10年」に書かれたと主張した（Arnold vii）。この時期の大部分はダヴ・コテージ時代と重なる。このコテージを保存するためのキャンペーンについては、Brooke, Knight [1900] 参照。

ズワスのライダル・マウントが ‘the cult of hearth and home’という価値体系に取り込まれていったように（Gill 208-209）、コウルリッジのマートル・コテージもまた、同じようなイメージを負わされることになったのだ。[30] かつてそうした家庭的な幸福に満足して人類救済を目的とする大作 *The Recluse* に取り組もうとしないワーズワスを批判したコウルリッジが、[31] 同じ価値体系に取り込まれてしまったというのは皮肉である。[32] ‘Reflections …’を書いたコウルリッジの趣旨は、そうした幸せな家庭的な空間を出て外の社会に関わらなければならないということであったが、結局この作品から引用されるのは、花に包まれた美しい田舎家を描いた冒頭部ばかりだった。さらに中産階級向けの家庭教育、道徳教育、英国珠玉の名作選といった趣旨を持つアンソロジーに組み込まれていくことで、[33] この詩に描かれたマートル・コテージの持つ「家庭的な幸福」という文化的イコンの役割が強まったのだろう。そう考えると、文学観光という文化現象のなかで「自然発生的」に記念碑化されたと見えるこのコテージのイメージも、様々な（おもに保守的な）出版物によって作られたものであったと言うべきかもしれない。結局 Alan Vardy が言うように、詩人の公的なイメージというのは、その時々の時代の要請、共同体の価値観に合わせて、選択と省略（忘却）、誤読、再解釈を通して常に作り替えられていくものなのだ。[34]

文学研究者たちは伝記的・文学史的な意義を考えて、ネザー・ストーウィのコテージをコウルリッジの家として公式に保存・記憶することに決めた。彼らがこの場所を重要視したのがワーズワスとの関係を意識してのことだったように、マートル・コテージを愛でる文学旅行者たちの想像力というのもまた、ワーズワスのライダル・マウントを愛でる精神と共通していたというのは興味深い。ライダル・マウントもマートル・コテージも、非公式ではあったが、ヴィクトリア朝中産階級の文化的嗜好—英国的なるもの、家庭的なるものの称揚—を反映する記念碑だったと言える。しかしヴィクトリア朝の終わる頃、文学史的価値という観点から、これら二つ家は「詩人の記念碑」としての座を、それぞれ

30　無論コウルリッジに対しては、こうした保守的・家庭的なイメージと矛盾する批判—剽窃、アヘン中毒、家庭放棄、ジャコバンといった誇りも常にあった。他方 David Hogsette は、19世紀半ばの中産階級の一般読者（‘a more general and less sophisticated audience’）向けの文芸雑誌を分析し、ヴィクトリア朝の中産階級の読者にとってコウルリッジは「古きよきイギリス」の価値体系（Englishness）を表す文化遺産となっていったと論じている（Hogsette 63-75）。

31　S.T. Coleridge’s letter to Thomas Poole, 14 October 1803（*CL*, 2:1013）.

32　Sonoda は、家庭における女子教育に対する関心から、後期のコウルリッジは中産階級の女性を読者層とするギフトブックへの寄稿も積極的に引き受けたとする（Sonoda 64-65）。コウルリッジ自身が保守的な階層に受け入れられる素地を作っていたとも言える。

33　注10参照。

34　Vardy は、コウルリッジの公的イメージが彼自身によって、また彼の死後遺族たちによって、いかに作られていったかを丁寧に追っている。特に 1 - 9 参照。

ダヴ・コテージ、ネザー・ストーウィのコテージに取って替わられるのである。[35] それは、ワーズワスとコウルリッジの共生時代を両詩人にとっての黄金時代とみなし、ひいてはそれをロマン主義文学の開花期とみなす文学史的価値体系を反映した新しい記念碑であった。

参考文献

Anon. ‘On Some Differences between Cottages and Castles’. *Murray’s Magazine* 2（1887）: 647-61.

Anon. ‘On the Coleridge Cottage, Clevedon’. *Proceedings of Somersetshire Archaeological and Natural History Society during the Year 1899*（1899）: 49-50.

Arnold, Matthew. ‘The Preface’ to *Poems of Wordsworth, chosen and edited by Matthew Arnold*. London: Macmillan, 1879. v-xxvi.

Bell, James. *A New and Comprehensive Gazetteer of England and Wales*. 4 vols. Glasgow: A. Fullarton & Co., 1836.

Beedle, T（publisher）. *Beedle’s Popular Sixpenny Handbook of Weston-super-Mare and Its Vicinity*. Weston-Super-Mare: T. Beedle, 1863.

Brooke, Stopford. *Dove Cottage: Wordsworth’s Home: 1800-1808*. London: Macmillan, 1890.

Buzard, James. *The Beaten Track: European Tourism, Literature, and the Ways to ‘Culture’, 1800-1918*. Oxford: Clarendon, 1993; rept. 1998.

Carry, G. M. W. ‘A Visit to Clevedon, with Thoughts on S. T. Coleridge, A. H. Hallam, and Tennyson’. *The Maritime Monthly* 4（1874）: 370-74.

Chilcott J（publisher）. *Chilcott’s Clevedon New Guide, with Historical Notices of Clevedon Court, Walton Castle, ... Also, a Description of Coleridge’s Cottage, and the Principal Attractions in the Neighbourhood*. Bristol: J. Chilcott, c1841.

Chorley, Henry Fothergill. *Memorials of Mrs. Hemans*. 2 vols. London: Saunders

35　ただし、コウルリッジの家とワーズワスの家とは、必ずしも類比関係を結べない。詩人存命中に崇拝者の訪問を受けた家という点では、ライダル・マウントと類似するのはハイゲイトの家である。他方信憑性が疑わしいまま詩人の家として記念碑化された点では、マートル・コテージはホークスヘッドのコテージと類似する。また、ダヴ・コテージの保存運動が比較的すんなり進んだ背景には、観光の中心地に存在するという立地条件のよさがあり、その点ネザー・ストーウィのコテージとは少し事情が違う。なお、20世紀末頃よりライダル・マウントはダヴ・コテージと同等の地位を取り戻しつつあり、その点もマートル・コテージとは事情が異なる。

and Otley, 1836.

Coleridge, Samuel Taylor. *The Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. E. L. Griggs. 6 vols. Oxford: Clarendon, 1956-71.

Collins, E. J. Mortimer. 'Two Poets of England'. *Temple Bar: A London Magazine* 16 (December 1866): 106-16.

Cottle, Joseph. *Early Recollections*: *Chiefly relating to the late Samuel Taylor Coleridge during his long residence in Bristol*. 2 vols. London: Longman, 1837.

Cross, Joseph. *A Year in Europe*. Nashville: Southern Methodist Publishing House, 1859.

Easley, Alexis. *Literary Celebrity, Gender and Victorian Authorship, 1850-1914*. Newark: University of Delaware Press, 2011.

Elton, Arthur Hallam, ed. *A Few Years of the Life of Mary Elizabeth Elton, from Letters of Her Own and of Those Whom She Loved*. Clevedon Court, 1877.

Gill, Stephen. *Wordsworth and the Victorians*. Oxford: Oxford University Press, 1998.

Goss, William Henry. *The Life and Death of Llewllynn Jewitt with Fragmentary Memoirs of Samuel Carter Hall*. London: Henry Gray, 1889.

Hall, Samuel Carter. 'Memoirs of the Authors of the Age: Coleridge'. *The Art Journal* 4 (1865): 49-55.

------. *A Book of Memories: Great Men and Women of the Age, from Personal Acquaintance*. London: Virtue & Co. Ltd., 1871.

Hendrix, Harald, ed. *Writers' Houses and the Making of Memory*. New York: Routledge, 2008.

Hogsette, David S. 'Coleridge as Victorian Heirloom: Nostalgic Rhetoric in the Early Victorian Reviews of *Poetical Works*'. *Studies in Romanticism* 37 (Spring 1998): 63-75.

Holmes, Richard. *Coleridge: Early Visions*. London: Hodder & Stoughton, 1989; Harmondsworth: Penguin, 1990.

------. *Coleridge: Darker Reflections*. London: Harper Collins, 1998; London: Flamingo, 1999.

Howitt, William. *Homes and Haunts of the Most Eminent British Poets*. 2 vols. London: Richard Bentley, 1847.

Jay, Eileen. *Wordsworth at Colthouse*. Kendal: Titus Wilson & Son Ltd., 1970, 1981.

Jones-Hunt, William. ‘Seventy Years ago’, *Clevedon Mercury*, 25 August 1888.

Knight, William. *Dove Cottage, Grasmere: from 1800 to 1900*. Ambleside: G. Middleton, 1900.

------. *Coleridge and Wordsworth in the West Country*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1914.

Lawrence, Berta. *Coleridge and Wordsworth in Somerset*. Newton Abbot: David & Charles, 1970.

Lewis, Samuel. *A Topographical Dictionary of England.* 4 vols. London: S. Lewis & Co., 1831.

Mayberry, Tom. *Coleridge and Wordsworth: The Crucible of Friendship.* Trowbridge: Sutton Publishing, 1992.

Miall, David S. ‘The Campaign to Acquire Coleridge Cottage’. *The Wordsworth Circle* 22.1（Winter 1991）: 82-88.

Murray, John（publisher）. *Murray’s Handbook for Travellers in Wiltshire, Dorsetshire, and Somersetshire*. London: John Murray, 1869.

North, Julian. *The Domestication of Genius: Biography and the Romantic Poet.* Oxford: Oxford University Press, 2009.

------. ‘Literary Biography and the House of the Poet’. Watson [2009] 49-26.

Ousby, Ian. *The Englishman’s England: Taste, Travel and the Rise of Tourism.* Cambridge: Cambridge University Press, 1990; London: Pimlico, 2002.

Palmowski, Jan. ‘Travels with Baedeker: the Guidebook and Middle Classes in the Victorian and Edwardian Britain’. *Histories of Leisure.* Ed. Rudy Koshar. Oxford: Berg, 2002. 105-30.

Robinson, Mike and Hans Christian Andersen, eds. *Literature and Tourism: Essays in the Reading and Writing of Tourism*. London: Continuum, 2002.

Salmon, Arthur Leslie. *Literary Rambles in the West of England*. London: Chatto & Windus, 1906.

Sonoda, Akiko. ‘Coleridge’s Later Poetry and the Rise of Literary Annuals’. *The Coleridge Bulletin* n.s. 26（Winter 2005）: 58-74.

Vardy, Alan D. *Constructing Coleridge: The Posthumous Life of the Author.* Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010.

Walton, John K. *The English Seaside Resort: A Social History 1750-1914.* Leicester: Leicester University Press, 1983.

Ward, Wilfrid Philip. *Aubrey de Vere: A Memoir Based on his Unpublished Diaries and Correspondence*. London: Longman, 1904.

Warren, Robert Hall. ‘The Church of St Andrew, Clevedon’. *Proceedings of the Clifton Antiquarian Club for 1897-99*（1900）: 58-70.

Watson, Nicola J. *The Literary Tourist*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006.

------, ed. *Literary Tourism and Nineteenth-Century Culture*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2009.

Wordsworth, William and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads. Reprinted from the First Edition*（*1798*）. Ed. Edward Dowden. London: David Nutt, 1890.

Yoshikawa, Saeko. ‘Wordsworth in the Guides’. *Grasmere 2010*（2010）: 101-14.